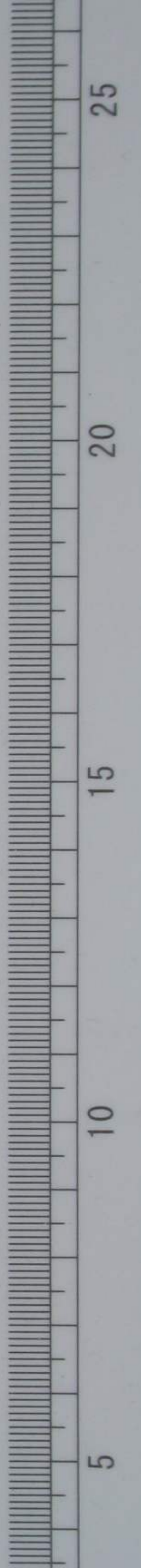


尾上柴舟著

歌集
朝ぐもり

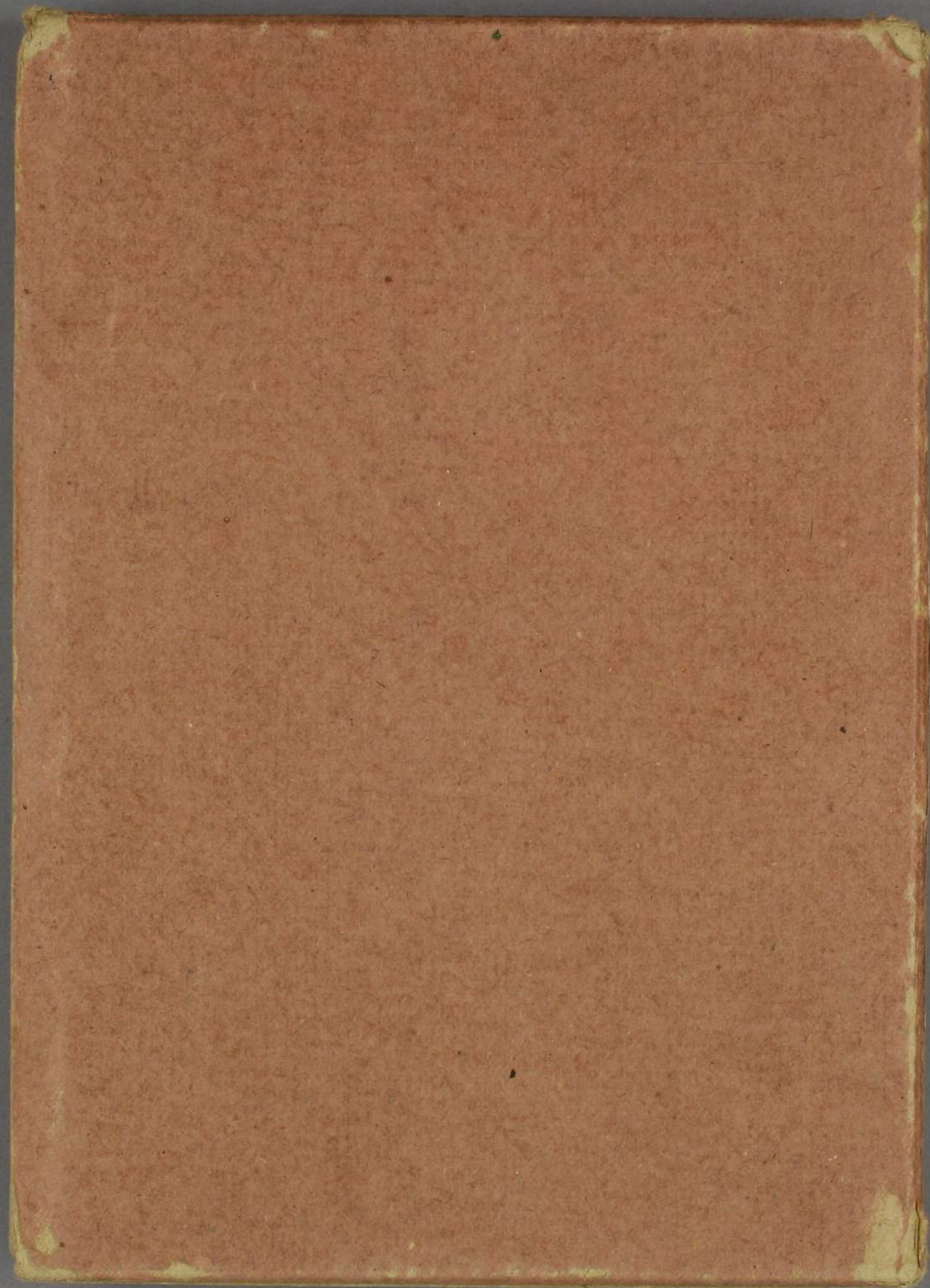
東京
紅玉堂出版

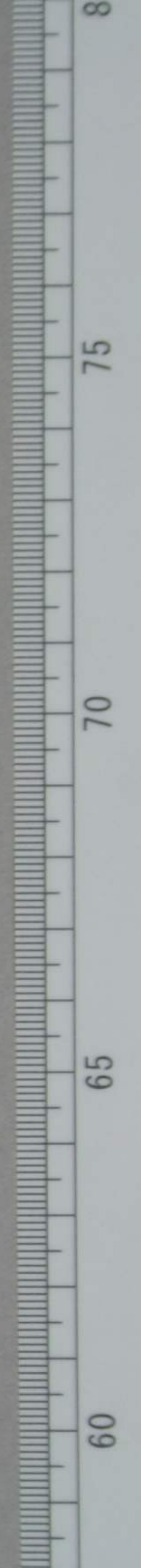
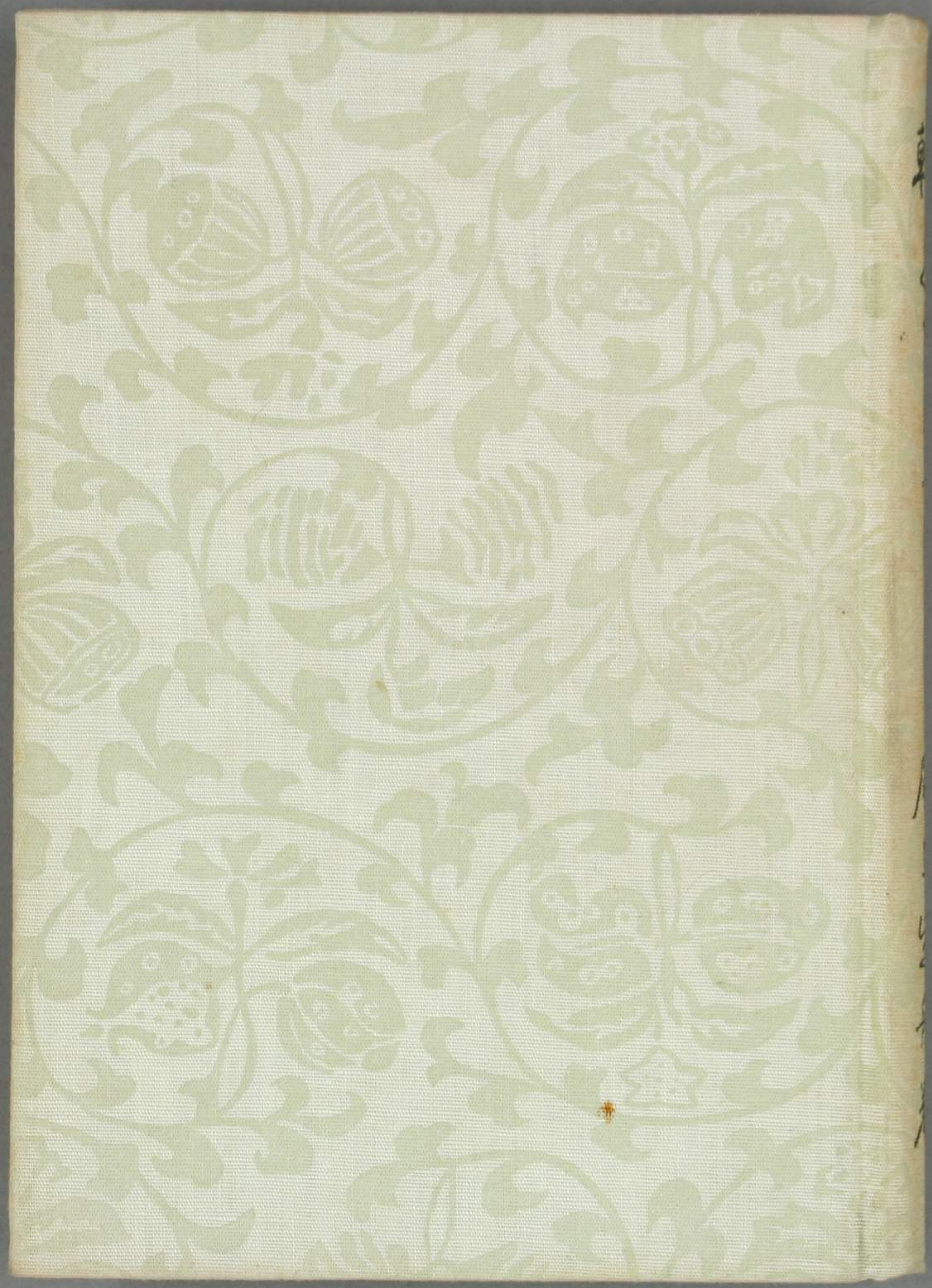


朝

ごり

尾上紫舟著





朝

づり

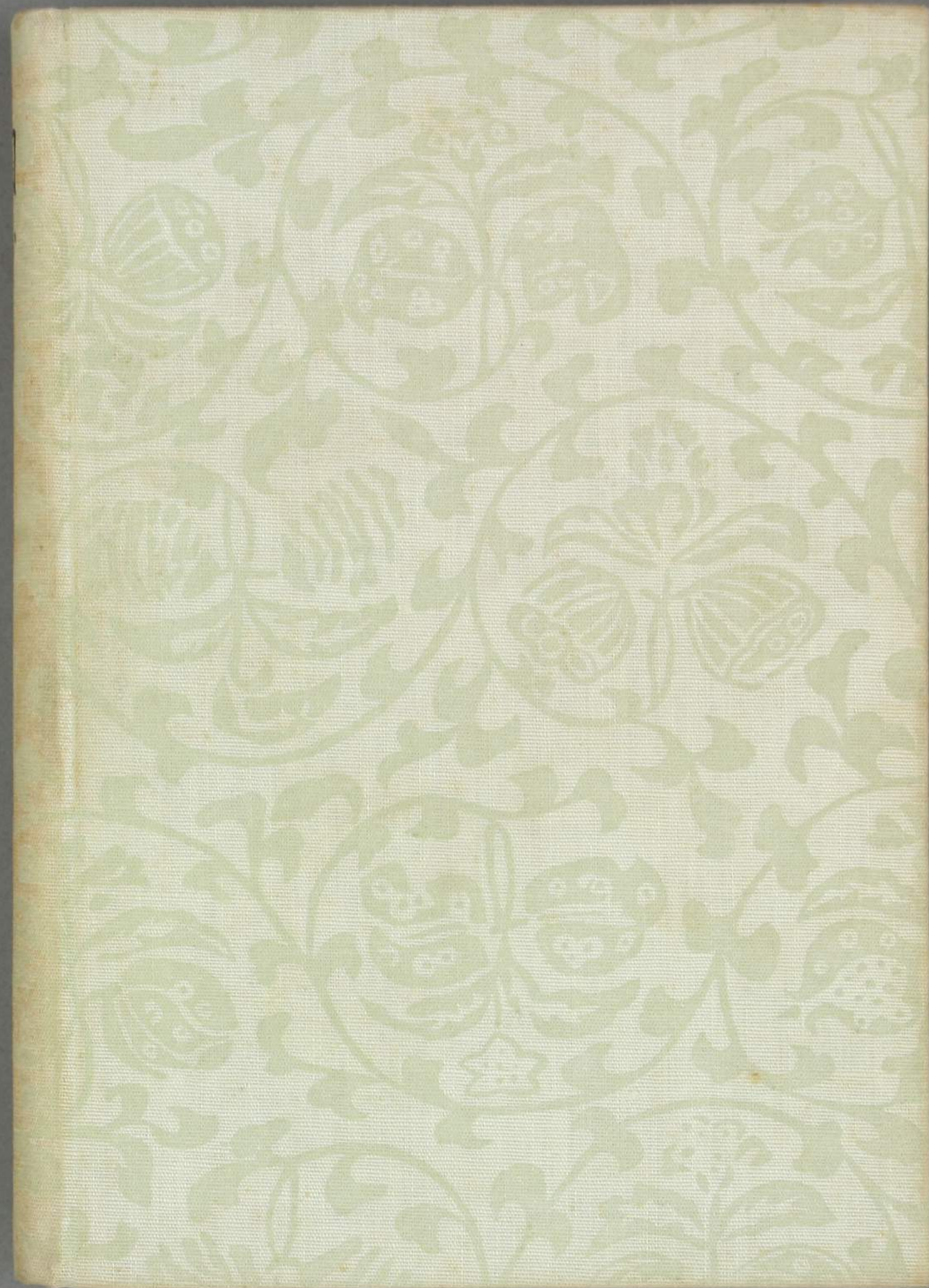
尾上

紫舟

着

着

着





尾上柴舟著

歌集
朝ぐもり

東京
紅玉堂書店版

尾上柴舟著

歌集
朝ぐもり

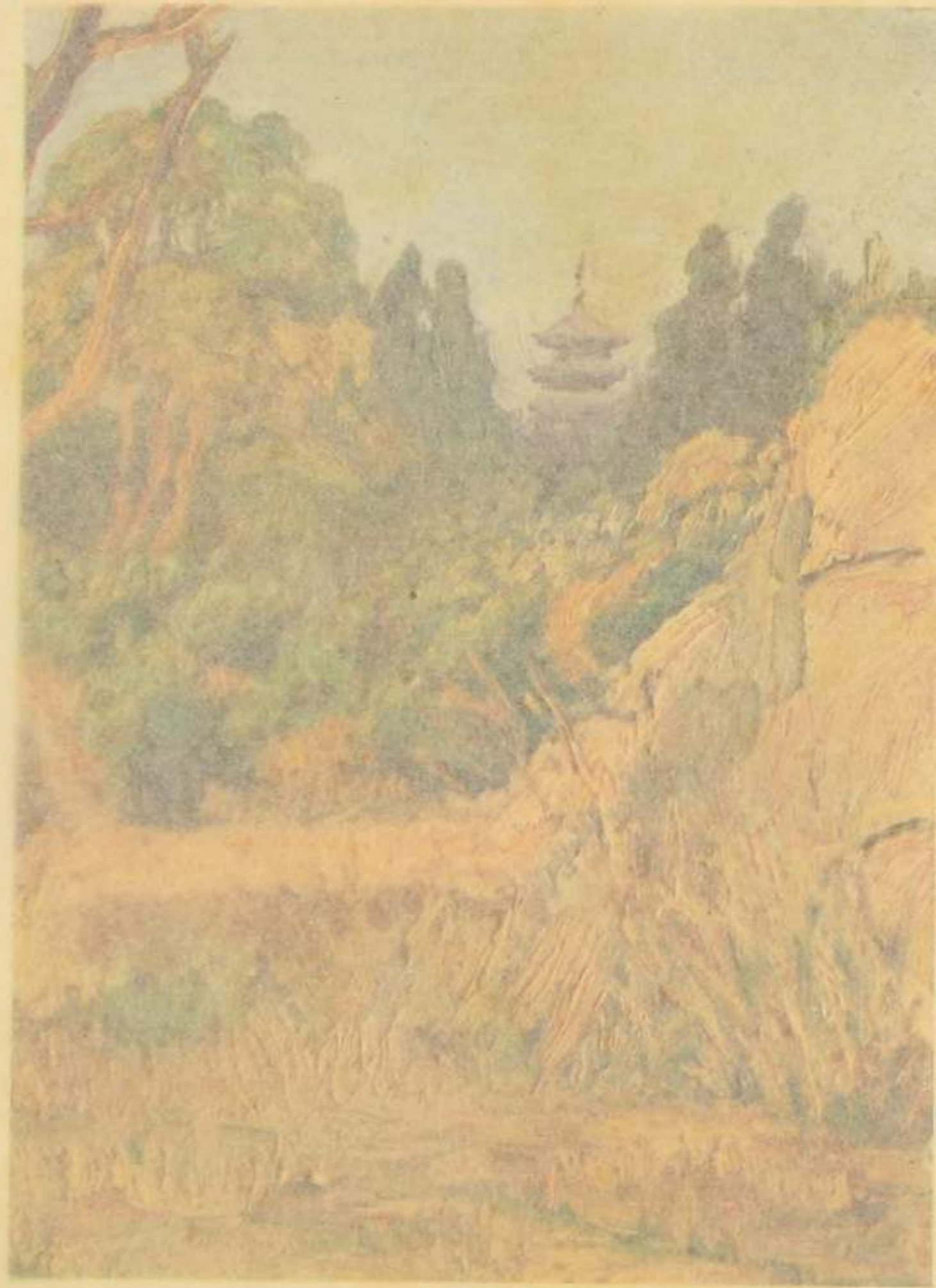
東京
紅玉堂書店版

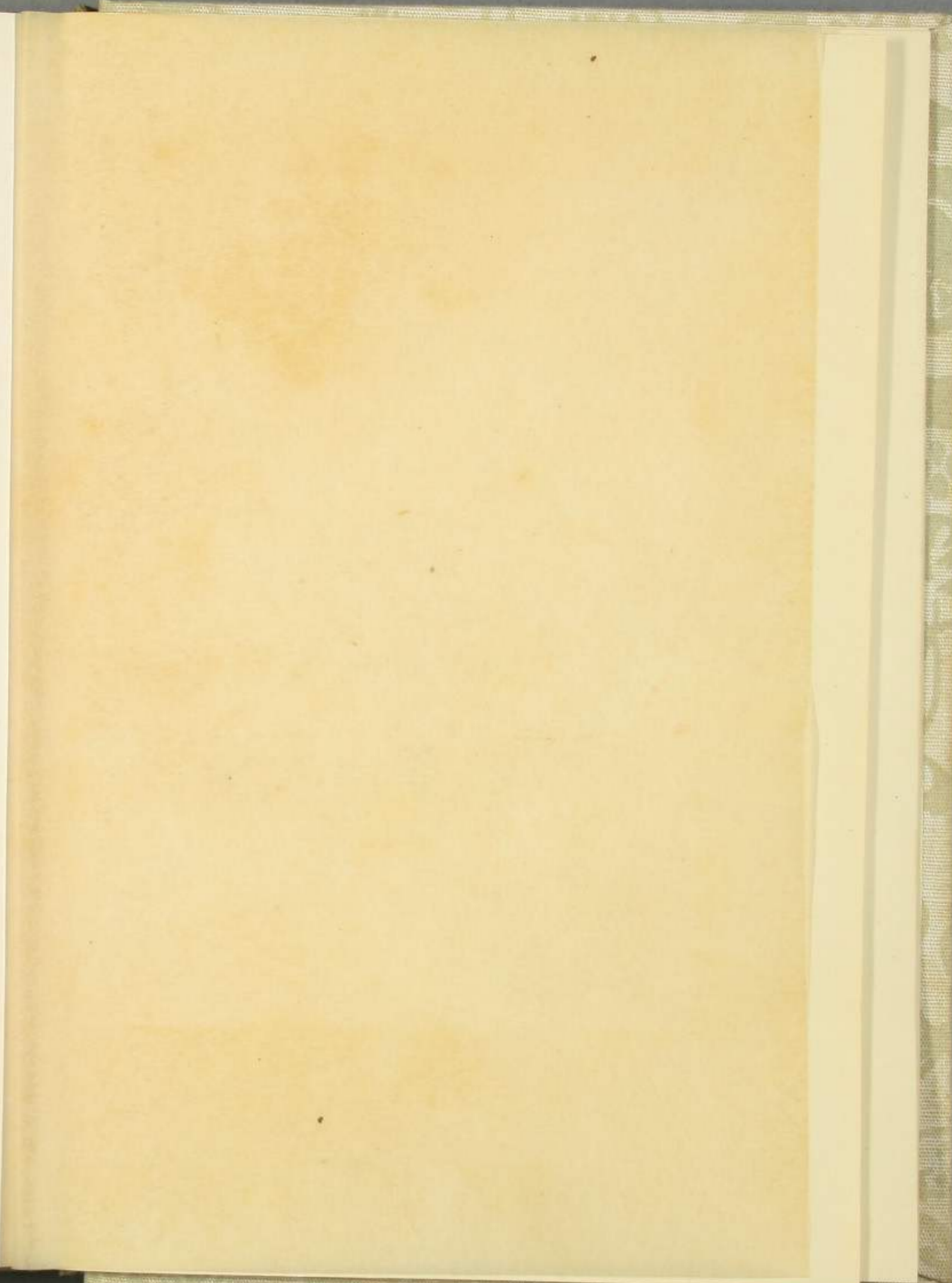
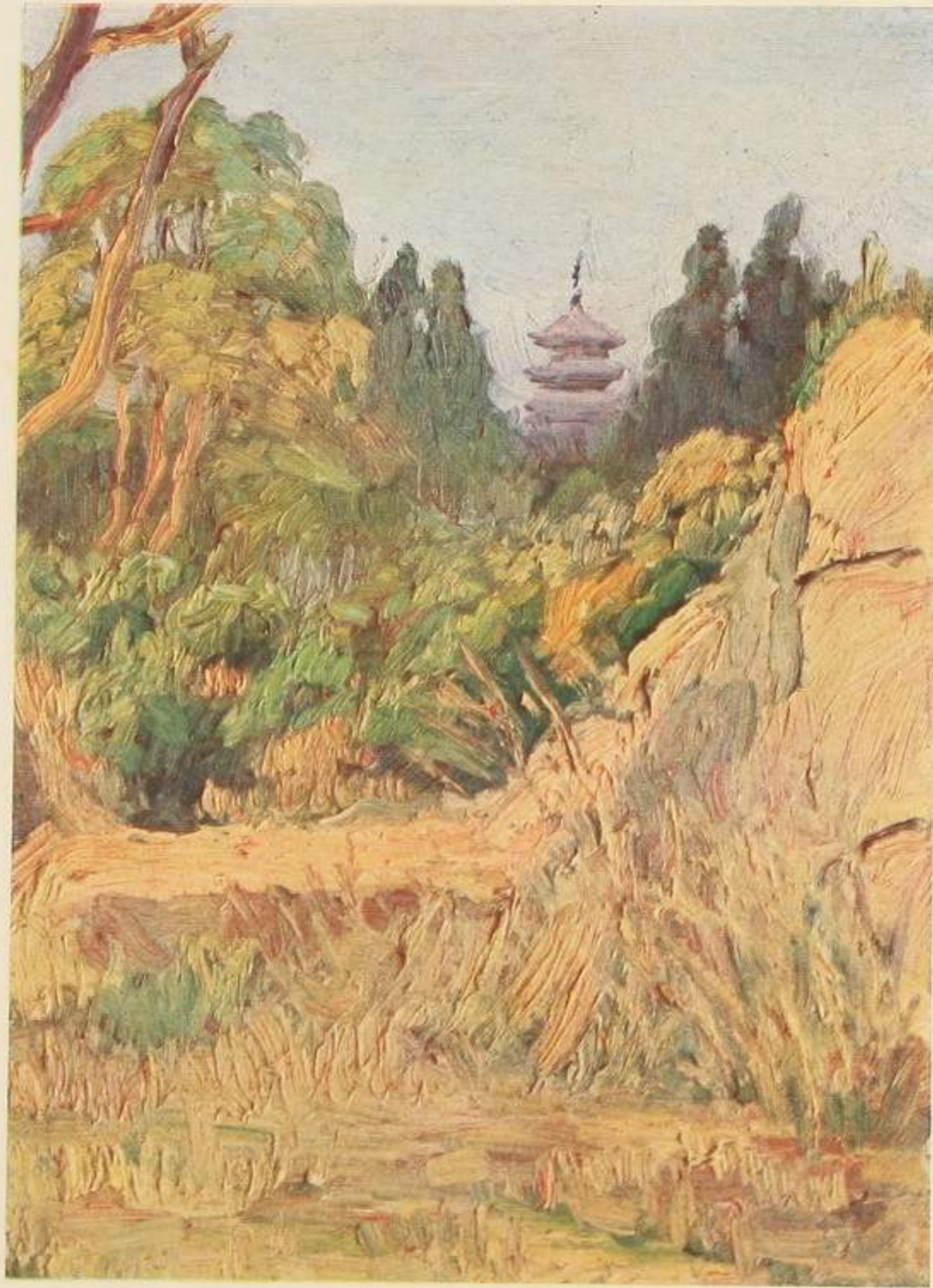
目次

大正七年	一
大正八年	五九
大正九年	九五
大正十年	三五
大正十一年	五九
大正十二年	二七

表紙
口繪 奈良郊外

小泉勝爾氏
岡野榮氏





大正七年

〔百六十四首〕

堰塞^み越す水のつめたくなりぬらし菜洗ふ音の
しみじみ聞こゆ

嵌め^{ちま}し貝のごとしも割^くぎられし小窓の中の大
空の星

茂り葉の蔭ゆきつくし仰ぐ眼につとらつりた
る星の大きさ

またたける星の心も寒からし黒く大きく重き
夜の空

迫り来る冬のわびしさ追はむとて絶えず燃や
しつストーブの火を

厨より妻の笑ひの聲ひびきこの夕暮の家内た
のしも

書き終へし夜の原稿にペンを置き静かに思ふ
書き終へし事

汝がためにぬくみをのこす土あるか夜をほの
啼く冬のこほろぎ

曉ちかし牛乳車音はして風庭の木に立ちぬか
そけく

かくばかり人と違ふと知らざりしわが心にも
驚かれぬる

眼を病みて

こがらしの門松を吹く年頭の醫師いしやの家に薬待
つわれは

もののみな二しへになり三戸いへになり病む眼に
うつる春の天地

青深く澄めるみ空にうちむかひやや痛む眼を
あけにけるかな

背光せこうをもてる佛のこちして見やりぬ家の妻
を婢めかけを

なきつつも夢に入る子のこちして涙ぬぐひ
つ宵の小床に

おのづから流るる涙とどめかね枕濡らしつ妻
にしらゆな

まなぶたをあくる醫師いしの太き指ゆび指紋さきあらくも
眼まなこにうつるかな

立てるもの横たはるもの臥せるもの皆遠ざか
りさびし天地

頬をつたふ薬のしづくおさへつつ物見物書く
生きゐむがため

眼を病めば人も草木もはた家も親しみ難しわ
れと離れて

あけ難き目蓋をしひてあけみれば驚くばかり
朝のあかるき

つくづくと鏡をよせてよく見ればわが瞳ひとみ子とも
も思はれなくに

四十年よんじゅうねんもわがため物をうつし來しわが瞳子な
り愛でであらめや

人を弔ひて

はるかなる空より來りふと消えし光の如き君
にしありけり

不信者は再び君をみるを得じ天つ御國に入る
口知らねば

何により君がみうへを稱ふべき野にさく百合
は萎む時あり

病みて

病むこともすこし嬉しと思ひつる二日はとく
に過ぎにしものを

寝ることの堪へがたければ朝の床めまひする
身を起してもみる

木枯は窓のがらすをゆすれども臥せば心のう
ごくともせず

夜は來ぬ枕のうへの油繪の川ぐるぐるとまた
夜は來ぬ

壁紙の花蔓草のみだれあひて眼に入り來る熱
は高しも

珍らしき世界の中をわれゆくか見ゆる物みな
黄を帯びて來ぬ

朝に添へゆふべに添へてわが肌を検温器こそ
親しかりけれ

一處枕の低くなるまでに片寝するかな身のい
たみゆゑ

夕時雨雪となりけむ身ぶるひをすらしき木木
の音ぞたえせぬ

日ひらけば朝の光ぞさやかなるかかる日もま
た寝ねばならぬか

安んぜぬ底の思のすべなさに痛みこらへて寝
がへりをする

病むよりもかなしきものは病むごとに身にお
ぼえくる衰にして

手をちぢめ足をちぢめて寝てあれば柩の中に
居るこちする

物もいはず身じろきもせでいねつづくこの身
 さながら屍しかたのごと

雪の日

白雪のほどろほどろにふり積めば心あやしく
 たひらなりけり

つとみれば二羽の雀のむきあひておとす小枝
 のいささかの雪

降りおもる枝の雪よりいささかの黒みを帯び
 て梅さける見ゆ

雪すこし風に落ればいささ竹身ぶるひをし
 て起りかへりたる

病みあがり朝あしたの庭におりかねて妻に掃はす椎
 の枝えだの雪

藍靛の空の下びに飽くまでも白くかがやく庭
の雪かな

猶のこる病をまもり朝日さすさ庭の雪を玻璃
越しに見つ

樋をつたふ雪どけの音たえずして夜は春の夜
になりにけるかな

月の夜

中空に月はかかれり地つちにいま短き影をわがひ
きて立つ

湯をいでてやや滑らけきわが肌に手を觸れな
がら仰ぐ月かな

木蓮の花白白と浮きいでて垣穂うれしき月の
夜の庭

夜の空の青さが前に動くかな明日は散るべき
木蓮の花

大磯にて

よる波のあかるき濱に夏近き雲ぞひとむら影
落としたる

水のごと手よりこぼれて砂濱の砂はことなく
砂にかへりぬ

砂濱の砂の光のやはらかに正午ひるを知らせて眼
に泌み來る

わくらばにおひたる草のあはれさを見つつぞ
まろぶ春の砂山

なむるごと足にはひよる白泡をなつかしみつ
つうちぬらす靴

をとめらが傘の水色すがやかに海の夏こそ近
づきにけれ

やはらかく暮春の波のよせかへりなごむ限を
なごみたる海

午後風たちぬ

いくたびもくもる眼鏡をぬぐひつつ飛沫霧ら
へる濱邊にぞ立つ

ところどころさせる光にきらめきて雲の下な
る海ぞ狂へる

たえまなく来てはひろごる白泡にくろき渚ぞ
暮れ惱みたる

迫り来て立ち上りたる波の腹あをぐるくして
濱暮れむとす

川にて

風の日の鷗悲しや川の上におつる埃の中の舞
ひつつ

さざなみの流れたゆたふ川の面ややにふくれ
て汐満ちむとす

舟ばたにをどるは鯔か河口の葭洲ゆらめき近
づきにけり

ある朝

さわやけき音を立てつつ朝電車軽き心のわれ
乗せて行く

着て出づる軽き夏帽夏背廣夏こそ朝はすがす
がしけれ

街路樹のあしたの雫肩うちて涼しく濡れし麻
の夏服

山にて

青白く雑木の上を靄流れ谷間より先づ夜とな
らむとす

生ひつづく岨の高萱うちなびき谷より風の上
りくるかな

底ふかき谷の細松風すらしまどへる靄のやや
動く見ゆ

谷の道上りつくして岨の上にわが立ち見れば
廣しや谷は

裏山は松山ならしこ深くもわたる嵐の音ぞき
こゆる

八っ手

夕ちかみ八っ手の木かげをぐらさに暮の聲す
も夏たけにけり

もてあます様ともみえて八つ手の木廣葉廣葉
を皆垂らしをり

雨近みくもる書齋のまどがらすひけば八つ手
の葉ぞまともなる

戸明くれば逃^ヒ眼^メ使ひてわれを見つ揺らぐ廣葉
の上の小蛙

研究室にて

たえまなき心いられのその中に生きてもの書
く今日もさびしく

いつの日にとげむ思を窓さきの夏の花草花は
散りにき

去年の事また書きつげば書きつげば今日のわ
れとは思はれなくに

あたたかき血汐ぞ頬に上りくる物書く時のわ
が若さかな

床トコの上の塵のやうなる身なれども書けば千年
も眼に在るごとし

窓をつとあくれば濤のこちして大らかに入
る夏の日の風

限ある力もちて限なきことをぞわが書く神
はたすけよ

外面には夏の痛苦に堪へざらむ〇る電車の聲
し高しも

われ一人はたらくものか天地は眞日の眞盛り
物音もせず

窓がらす落つる光にかがやきて幸ありし日は
今去らむとす

風に鳴る窓の戸の音蟬の聲試鍊のなかにわが
あるごとし

ただ一人思ふは遠き世世のこと世世の聖もわ
れを見まさね

朝より一つの事を思ひえでけふも夕べとなり
にけるはや

わがもてる限の力見ばやとて書けばはやしも
ペンの歩みは

窓近く鳥にとられし蟬の聲ペンのはこびをふ
と止めけり

あこりたつ夕とどろきに驚きてペンを置く時
啼けるかなかな

今日はまづ汝と別れむあしたより使ひしペン
よ今やすく居よ

黝黒の空を斜にあなきらら長く弧を書くいな
づまの影

謎のごと飛びかふものか夕立の雲のまへなる
つばくらの群

いかづちのとどろと鳴れば夕雲の裂目白くも
日のさすが見ゆ

日のあたる枝はそよけど夕まけて暗き方より
静もる大樹

流れ雲日をさへぎれば嬉しげに小草をそよぐ
日ざかりの庭

調

貧しうて住みし木蔭の一つ家を思はせてなく
かなかなの聲

何の身かなれるかなかな夕ぐれの悲しき時を
來ては頻啼く

ほのぐらき垣のかなたに隣家の水打つおとし
かなかなの啼く

うす青き風に流れてかなかなの聲の來れば夏
ぞ悲しき

こまやかに夕べの空氣ふるはして靄かかる木
に啼けるかなかな

夕ぐれの庭の繁みにあるなしの風目に見えて
かなかなの啼く

夕ぐれの青き空氣に水のごとながれて消ゆる
かなかなの聲

下つ枝は黒みわたれど夕光のこる梢になける
かなかな

かなかなの聲のしきれば道忘れ泣きし昔の故
郷の見ゆ

初秋の頃

蚊のこゑの乏しくなりしうれしさに深夜なほ
取るわが秋のペン

蚊張の中に電燈入れて稚子のごといね惜しみ
する初秋の宵

新しき敷布の上のまるびねもころよいかな
秋の浅夜は

目馴れては蚊帳の古びも何ななず初秋の夜を
楽しくもぬる

ある夜

久にして得たる心の静やかさこの嬉しさをい
かにすべきぞ

蓋をして時計は箱にをさめたり今ぞまことに
物音のなき

夜の氣の重くしづもる底にわが低き呼吸の音
のみぞする

死と生と二つの國の國境われいま立てり心ゆ
るかす

山思へば山風きこえ川思へば川風きこえ夜は
しづかなり

細き息すればしづかに氣のゆれて夜の光のす
こし亂るる

み空にはたえず夜の雲ゆくらむをゆらぎだに
せぬこの心かな

我とわが心の外に何かあるこの眞夜中にさめ
ゐるものは

鶏

鶏のをりをりを砂を浴ぶる音静かなる日は正ひ午る
となりけり

めんどりの眼あけ眼ふたぎ箱にゐて午後の鳥
小屋ものおともなし

鶏の夜よをなくこゑ秋淺き宵の空氣にとほりて
きこゆ

病みて

聲たかく語らひわらひ戯れてあれど病の秋は
さびしき

日に高く骨のなりゆくこちしてけうとくも
あるか肌の手ざはり

落ち居ざる病ひごこちに馴れ馴れし中に一年
過ぎむとするか

いとせめてをかしと思はむ友の醫師打診する
手の躍る如きを

書き果てて今日はかぎりとペンおけば病の事
の思はれて來ぬ

野のはてに向伏す空の藍靛のいづこより吹く
秋の風ぞも

いたましき砲車のあとの草のはな濁れる水に
ひたりてぞ咲く

風吹けどなびかむほどの餘裕あまだにあらで短き
荒野らの草

珍らしき薄龍膽うすりんどうつみとればこの野の秋を奪ふ
こちす

のびもえて花もつ草をあはれとて歩とどめつ
秋風の中

しみじみと身のはかなさを覺え來ぬ久しくわ
れは野にも居難し

春日野にて

にはかにも月の光のなかに來つちとせの杉の
影をふむまに

露じめる眞袖たれつつ赤人も憶良もかかる月
に立ちけむ

露ながらわがふむ草に赤裳ひきいにしへ人も
月やあふぎし

てる月の光となりて降りくらし古人のうれひ
かなしび

夜の氣も月の光もち沈み動かぬなかにさを
しもなくも

夜の露しとどに下りて月にふむ大野の草に物
かげなし

露ながらふむや芝草よき人のうれひ歎かひ踏
みし芝草

今千歳ちとせ後に生れてここに來て誰か月みる我と
ひとしく

月影をうくる枝のみ白うして千歳の森は夜更
けたるかな

照る月の前にぬぐひつ果もなきしじまの中に
おつる涙を

大阪にて

夢成らぬ枕の上に廣告の明滅の灯ぞ川わたり
くる

いね足らぬ人の面ざし青白く大阪の夜は明け
はてにけり

靄散れば濁れる水の浮脂きららにひかり日は
させりけり

京都にて

木木のかげ深うしづみて音もなき真青の水に
腹かへす魚(嵐山にて)

北山の濃藍(ちか)の前の二重虹(にじ)時雨は遠く過ぎにけ
らしな

竹原の葉漏りの光かすけきに黒木乾かぬ秋の
野の宮

うち仰ぐ御殿の奥のをぐらきにあやに光るは
高御座かも(御所にて)

雨くらしき御階に近く常世もの橋の實の照れる
色はも

うすく濃く梢梢のうちけぶり朝日ゆたけき日
野の松山

夢に見し日野の外山の前に来てこは何により
湧ける愁ぞ

たちとまりなほも聞くかないにしへの石田いしだの
小野の竹の雫を

道のべの竹葉の霜に朝日さし小鳥よくなき冬
の山科

たまさかにあひてすこしく物語る四人が中に
ともる京の灯(圓山にて)

星もなき真やみの冬の夜深きに愛宕やまかも
灯のともりたる

播磨にて

赤禿げし遠山脈とほやまなまの冬ざれの貧しく朝の眼に入
るものか(龍野にて)

白壁の家のあまたが見ゆれどもさびしや冬の
夕日の町は

格子して人無きに似る冬の町行けば晝なほ夜
ゆく如し

たぶたぶと小川はゆけど冬の町乏しく生きて
人のすむらし

冬ながら霞める空に鳶の舞ひ親と居る日の里
はしづけし

大正八年

〔九十七首〕

ややひろくおのが座席を占めえたるこの一事
も旅はうれしき(汽車にて)

生ぬるき中に一筋風ありて冬の夜汽車の寒き
さびしさ

隣りあふ人の撫肩やはらかによりかかり来て
さ夜はふかしも

冬の雨そそげる中に堀割の水のつめたく眞青
なるかな(秋田にて)

白けたる沖べを見ればあはれわがひとり渡り
て來し日おもほゆ

旅すれば心強くもあるものか知らでぞ來つる
われのおとろへ(家にかへりて)

犬咬傷を得て豫防注射のためとて傳染病研究所に行く
十八日ならでは完からずと云はる

雪しまき木枯狂ふこの頃の十八日をわが行く
べきか

今日もまた粒立つ膚にとほるべき注射の針に
おののくあした

あへぎ來し雪の日の部屋嬉しくも瓦斯すと
ぶの燃ゆる音する

濡れながらさまよふ様のあはれさにまた懲り
ずまに犬を呼ぶかな

冬の夜の寒き褥に痛みゐる片身あつればもの
ぞはかなき

悪しき夢つぎて見ゆれば痛む身を寒き夜床に
起したりけり

昔き歌の師直頼高大人の失せたまへりと聞きて

城跡のいただきの火のただ一つほのめく道を
君に通ひし

涙落つばかりおぼえて聞き入りし歌の御聲に
似る聲もあれ

明け馴れて幾度われの入りつらむ軋むならひ
の君が格子戸

故郷の炬燵を中の歌がたり君しなさねば誰れ
とすべきぞ

手品師

あやまたば明日は舞臺に出られじと歎き立つ
らむ手品師あはれ

受けむとし落ちくる刃仰ぎゐる手品師の眼は
燃ゆるが如し

眞蒼なるその顔いろよ手品師は死を決しても
ここに立つらし

満身の力ひとみに集めつつ手品師は見つ飛び
くる刃

一道の白き環ゑがき手品師の手よりめぐれる
五つの刃

白刃の前に立ちたる戦士かも手品師は今日
 じろきもせぬ

やと聲をかけて投ぐれば五つ色に光分れて飛
 びゆく刃

刃皆手にしかへれば手品師は片頬たまに笑を見せ
 にけるかな

山にて

うす黒く梢のひまにうち沈み山をはなれぬ夏
 の雨雲

のぼりゆく道もありやと頂の白枯れし木をさ
 して語らふ

夕靄は今し立つらし谷川の瀬波白くもにじみ
 そめたる

重重と霧のかさなる谷間よりなつかしきかな
人の聲する

木木の間には雲はしづみて静かなる山は月夜と
なりそめにけり

わが上を啼きつれわたる鳥かなし夕日のあと
の山のいただき

旅にて

若葉みなひかり疲れて夏の山静けき午後を藤
の匂へる

見下せばはるけき底に細き水きらめきゐつつ
谷はをぐらし

霧のうちに残れる雪の幾流ほのぼの見えて山
は明けたる

雲の影くろく大きく動きつつ物音もなき夏の
山かな

うす青くひたせる水の静けさに歎きやすらむ
白き岩むら(寝覺の床)

みるが中に岩も流もうるみつつ谷は静かに夕
づきにけり

くらき瀬に光を投げてわが汽車は夜の峽間に
入りにけるかな

四明が岳にて

うぐひすのやめば啼きつぐ杜宇若木けぶらふ
谷あひにして

青青とみちひろごりて琵琶のうみ水としもな
き色のさやけさ

ほつれたる糸のやうなる山の路かかる路をば
よくものぼりし

み空よりわがたみにしも來るものか涼しき風
よ絶えぬ光よ

大空のふかき緑のちかぢかと迫るをおぼゆ山
のいただき

さやりなく青き空より吹く風にさやぎあかる
き山のし小竹原はら

ちはやぶる神と人との中に立つひとりの如し
山にのぼれば

去來の墓

夕づく日あきらかにさす藪原に影ひくほども
あらぬ墓かな

亂れあひし文字のさやかに見えてきぬわれし
ばらくは眠りたるらし

いささかのよろめきおぼゆ疲れたる身をば椅
子よりすこし離せば

日をかさね工夫の如くつとむれば拓かれてゆ
く道の廣しも

涌くがごと出で来るものをわが力乏しとばか
りなどか思ひし

こころよく疲れたる眼にうつるかな標色なる
夕ぐれの空

定めつる事を正しくなし終へし今の心を誰に
語らむ

なし遂げしつとめに心満ち足りて悔のなき日
 はものぞさびしき

飯能にて

日の前を雲の行くらし背き見る武藏大野の照
 りかげりする

石投てばかはゆく小さき反響のおこれり秋の
 谷の浅水

さわらかに松より透ける秋の日に乾きてなら
 ぶ山の岩かな

箱根にて

月ささぬ小夜の峽間に霧あらし先立つ人の灯
 ぞうるみたる(仙石途上)

一すぢの月の夜風の頬ほにふれて道は峽間に入
 りにけるかな

峽の道川近ければ氣つけよと提灯の火をわが
上げにけり

月のさす夜山の雲をすかしのつ暗き谷間に立
つ林かな

なめらかに水はいはほを越えぬらし峽の夜川
は波の音もせぬ

さしそむる月にも色の見ゆやとて紅葉の山を
仰ぎたりけり

月光の中に入らむと山ぎはのをぐらき道をわ
が急ぐかな

山のさき一つめぐればあなさやけ月の光にわ
が逢へりけり

山かげのくらしに馴れし眼にしみて野の月光
のきらきらしさよ

影しあひ光りあひつつ一山の薄は月に並みふ
せりけり

月光の満てる夜の山火にあひし道の立木も白
光りする

ひそやかに動く一葉のかげもなし満ち極まれ
る月のひかりに

山の氣と月の光と寒ければわが指尖ぞまづ痺
れたる

雲はみな谷間谷間にしづませて高く聳つ月の
夜山は

ものいへどわれに答ふる人もなしあひ行く月
の道の静けさ

静けさの堪へがたければ靴音を高くも立つる
月の夜の道

落ちまさる紅葉の山の下露に濡るるけものも
あらむかあはれ

月のさすながしの上にほとばしりわがかくる
湯の音のさびしさ(仙石にて)

桁越えて流るる音をおもしろみ小夜の湯ぶね
につと入りにけり

うつとりと小夜のゆげたにかしら載せわがあ
ることも忘れむとする

澄みまさる夜半の心に堪へ難み月下の山を出
でてこそ見れ

月ははや山の端近くなりぬらし斜に白し湯屋
の玻璃戸の

ひそひそともの言ひあはせ戸の外に月の夜草
のよる音のする

いづこにか戸を繰る音しあはれ今月が落つる
と語る聲する

東ひんがしと思ふ方よりほの白みあけほの近き空のい
ろかな

朝の霧ほのに動きて山かげの紅葉の林風の音
ぞする(大地獄途上)

あきあまる道の落葉の朝つゆに冷えゆく靴も
 ころよき山

霧まよふ紅葉の林ひびかすは雉子ちひたつる
 犬の聲かも

底しらぬ谷よりあがる湯烟の上にくるぐる立
 てる神山

雨となる谷のさ霧の底にあなちひさく黒く人
 の動ける

押し寄するさ霧を裂きていと強く羽音立つる
 は何の鳥ども

光なく明けたる山の霧の中にたぎる泥湯どろかの音
 はとゞろに

たちわたる霧と一つの湖の上に青く浮ぶは塔
が島らし(昔の湖)

片岸の紅葉の山につらなりて霧にうする湖
の藍碧

舟ゆけばさ霧は消えて紅葉山今はまともにな
りにけらずや

伊東にて

旅人を里にとめじといふ如く山の木枯われ吹
きやまず

はたはたと袖吹きあふつ山風に逆らひ行く子
鳥の如しも

馬のふむ路傍の草の短さも風にしたがふ強ひ
て靡きて

しなやかに靡けばやがてかへりつつ風に馴れ
たる山の木木ども

川口に出口もとめて山の風一筋白う沖に行く
みゆ

山風にさからひ立てる波頭折らるるままに白
く煙らふ

風の魔の手のこちしてたえまなく波這ひの
ぼる島のきりぎし

大正九年

足十首

はてもなくならべる石の乾きたる心になりて
來つる川原かはら

玉川にて

おとろへし心をもちてわがふまば川原の石も
驚きやせむ

暮れてゆく水の面に風あらし細かさあやの岸
による見ゆ

一の宮にて

くろぐろと濱を埋めて干す魚の匂に夏も近よ
れるらし

濱ゆけば思はず近う寄る波にうれしく心驚き
にけり

吹きはばむ風の心にさからひてあはれ小さき
舟いづるみゆ

つとふめばあらずひ立ちて濱の砂暮春の風に
ひかり流るる

片岡海軍大將薨去の日

たたふるにしのぶにあまり偉なる君にしあれ
ばいかにいはまし

わがどちに異なるさまもあらざりさまことに
君は偉たかいなりけり

おほかたにのたまひすてし戯れごとも尊かり
つる君なりしかな

にこやかに語らひませばともすれば御軍人の
君を忘れつ

天地のひろさにしても容れ足らぬ偉なる人を
わが見つるかな

火のあらし焔の波の立ちし日も猶にこやかに
君はましけむ(日本海海戦の日をおもひて)

いかめしきみ軍人いくさびとの中なかにゐて君一人こそやさ
しかりけれ

大谷氏の令嬢をいたみて

おとなしくわが説く事を聞きをへてさて静や
かに君は笑みにき

花やけき君がゑまひをまたも見む日のあらず
とは思ひかねつつ

いく千とせありはありともものいはぬ都の土
に君をなしつる

しほみゆく花の香のごと漸漸げんげんに失せむと思へ
や君がほほゑみ

感冒の流行せる頃人をいたみて

音もなく消えゆく群の中に君あるらむものと
いかで思はむ

あまりにも死といふことに馴れ馴れしこの時
君を聞きにけるかな

まさやかに生きてはあれど消えてゆく人に伴
ふこちこそすれ

かるがろと散りゆく人の魂かとも見やるみ空
の風に散る雪

いたむにもことば盡きにし日の過ぎて梅散り
がたになりけるかな

うちつづき失せにし人の目に見えて青きもむ
なし春の大空

わが問へる人は残らず失せぬてふ故郷人の言
ぞさびしき

ある朝

落ちつける道の黒土梅散らす風のすべりもこ
こちよき朝

はららぎも絶えたる庭の土の上に濃くかさな
りてうつる木の影

ゆれあへる木草の影のきはだちて土もかがやく春の朝庭

逗子にて

洋館の赤き扉にてりかへし春の浦波日にかぎろへり

岸の畑麥ふむ人に聲かけぬはるけき崎の名をばとふとて

君がます葉山の崎のうす曇みるみる雨となりて近づく

夕近み渚の岩をめぐりつつ汐はしづかに波を揚げたる

散り散りになるべき人のふみゆけば夕べの眞砂音のさびしさ

もろともにかくて行くべき日はいつぞ別はな
がし命みじかし

太田弘子氏の追悼會にて

おくれぬと笑ひて君がひらくやと部屋の扉を
なほも見るかな

某侯爵の別業にて

木の下の露もつ芝に落ち添ひて風に動かぬ権
のしめり葉

廣庭の新葉の楓かき目のさせば何ともわかずする
匂かな

下りくれば初夏の水白みたり若葉の山のかけ
の古池

池にさす山の木のかけ雲の影すこし片寄せ舟
の動ける

眞清水の底に湧くらし池の藻の末房やかにう
ちゆらぎたる

水の上にさす日の影をきりて行く眞黒の鯉の
背の光かな

見てあれば驚くことも忘れたる魚の心にわれ
ならむとす

若葉みなそよぎをやめて夕近き光の中に静ま
れりけり

夏の初甲斐の國を過ぎて

山桐のほへる岡は數みえて甲斐の盆地は夏
がすみせり

うすべにに躑躅花さく峽かくれば山桐にほふ村
し近づく

山躑躅うすくれなるを眼に残し若葉の谷ぞ後
になりゆく

裏富士は夏霞せり遅咲のさくら匂へる岡のま
うへに

さしまさる正午^{ひる}近き日に色褪せてたるげに匂
ふ山桐の花

青麥の穂尖光らせ風ふけどいまだ散らざる山
桐の花

大津にて

初夏の波ふくかぜもうれしきに乗るべき汽船
の笛近づくも

石山にて

日は入りて名しらぬ小木の花しろしこの夕か
げになく鳥もがな

今だにも知られぬものをああ何ぞ千年の昔わ
が見むとする

近よれば近よるままにいにしへの姿の遠くな
りまさりつつ

書まに手をあてて思へば悲しまるあはれ何故た
どる昔ぞ

夕近き壁に目やればいにしへの影めくもの
亂れゆき交ふ

今日もまたかくて果てぬと夕ぐれの部屋の小
窓を閉せば歎なげかる

大日鯛二先生の病篤しと聞きて山奥の温泉に急ぐ途に

草いきれはげしき路をくれぐれと病みて久し
き人思ひ行く

ゆるやかに車は上る峽かの路悲しき心ゆるがし
めつつ

途に門下の人にあふ

今朝頓に篤しと云へば思はずも車の上に身を
立たせつる

思はむやこの荒山の奥にして君に別るる日に
あはむとは

そのかみを思ひ出づればたやすくもわが別る
べき君ならめやは

秋近み悲しく澄める山の空この空をしも一人
見るべき

大日先生を悼みて

抱きもち玉とめでゐるこの心ああこの心君が
たまひし

激しては刺すごと強くのたまひしそのみこと
 ばのまたも聞こえよ

眉あつめ歌おもひますその御面みおも今前にあり眼
 をしとづれば

そのかみにかへらむとしも願はねど昨日の君
 を一目見てしが

君によりたどりそめにし道を離れひらきし道
 も君によりてぞ

背きゆく一人の子ゆゑ心ゆゑ淋しと君は思ほ
 せりけむ

耳塞またきいますか如きこちして聞こえすぎ
 つわが思ふ事

思ひつるままにいひなばうなづきて聞きまさ
む日もあるべかりしを

まぎれるわが悲しさやいかならむ集ひ歎か
ふ人し散りなば(祭場にて)

集ひ来て悲しみあへる人人に異なる涙おとし
つわれは

君により開けそめつるわがまなこ閉ぢむ時ま
で守らせたまへ

病劇し眩暈しきりに到る

戯に病もよしといひしかど今日のここのせ
むすべのなさ

傾きて柱も壁もみなめぐるわが身いかなる波
中に居る

かがやかに眞闇の壁に物躍るこの夜とく明け
この夜とく逝け

かくながら生きつづきなば末つひに双とりて
も死ぬべしわれは

静やかにものを思へば天地ももとの形にかへ
れるごとし

年くるる日

またも年くれぬとなげさうち仰ぐ空のあまり
に事なかりかり

別れこし人のおほくを惜しむまに惜しまれぬ
べくならむとするか

大正十年

〔百十一首〕

病癒ゆ
見ゆるもの形正しくなりにけりねぶり足らへ
る眼まをひらけば

わが視線なほゆがむやとこころみに傍目もふ
らず道ゆきつづく

わびはてしこの一月をかへりみて病によわき
身をば嘲る

病なき身といまなりぬ新しく強く生きなむ強
く生きなむ

伊東にて

蒼黒う湧き立つ潮岩窪に流れたまれば澄みき
はまれる

魔のごとく魚つらなりて出でくるや潮しづけ
き岩のひまより

今啼くは鷹ぞといへばよる波の反射に痛き眼
をあけにけり

雲もなき海のみ空に澄みのぼり澄みひろこれ
る鷹の聲かも

つき出たる巖をひろみ岩の上の松こそ見えね
鷹の巢あらし

嵐吹く山の松が枝子をおきて今離れけむあは
れ親鷹

松風の中に一筋冴えとほり鷹啼くこゑの嘯
たりや

ゆたかにも羽のし聲あげ波の上を鷹こそめぐ
れ風に乗りつつ

飛び歸り再び啼かむ鷹待つとゆふべの岩によ
りて久しも

雪の日

庭隅の南天の實のくれなるの雪にうつるに目
こそおどろけ

朝を寝てふる雪さけば山莊の湯近き部屋にわ
が居るごとし

玻璃戸より見やるに高き雪の垣雪崩れし唄の
こちさへする

ある朝

厨女はおき出でぬらし水道の水ほとばしる音
のさやけさ

いね足れる目閉ぢてきけばわが胸の響もけさ
は豊かなるかな

落葉あまたひかりてあらむ舗石に新聞おとす
音のきこゆる

戸の外の小枝うつして一ところ障子あかるし
いざ起きてまし

ゆたかなる今の心やかかる世もありけるもの
を物を思ひし

隣家のはたきの音にやや濁る朝のひびきもい
ひしらぬかな

静かなる今の心をいとほしみ強ひて思はず一
日のこと

汽車にて

真夜中のプラットホーム半來て歸り行きけり
名を呼ぶ驛夫

人下りてひろき車にわが居れば堪へずこぼる
る夜の涙かな

柔かき夜のクッションに頭寄せはかなき事は
思はじとする

窓の外は雪の亂舞に亂走にみだれて暗の夜は
ふけむとす

いただきの松に日はさし枯木立薄紫にけぶら
へる山

人去ればやや痛み來し身を立たせ下す小棚の
菓物の籠

皇太子殿下御外遊の日

皇御子はかしこきかもよ霜に吹く朝風の中を
遠くいでます

大御身にさはりあらすなうら若く御子はいま
せりさはりあらすな

御供人汝が過ぞ過ぞ御子の御上にさはりあら
さば

あのづから目に満つ涙御車の過ぎて後にぞわ
が拭ひつる

羽衣の松の邊にて

砂山を上りつくせばあなあはれ霞める海の波
はたゆたに

いにしへもわがごと人の歎きけむ濱の砂原行
きかへりつつ

はるばるとちひさきあとを續けつつ砂の道行
くわれら旅人

ささやけき響を立てて濱の砂われらが跡を埋
めてゆくも

とこしへの海にむかへば短かる命にまざる悲
しみぞなき

下りて來む人もやあるとほの青く霞む天路を
見れば遠しも

松の上に霞める富士の山巒の雪の光も暖かき
日や

安倍川の邊にて

安倍川のひろき川原をつらぬきて水とともに
も速き風來る

安倍川の板の假橋荷車のとどろき來る音のか
しこさ

風つよみ草ものびざる川原かはまらに遊ぶ子あらし旗
あまた見ゆ

流れわび山の眞土のたまるらしこの川淀の濁
深しも

吐月峰にて

つと入れば寺の石橋かるやかに白花椿落ちま
ろびたり

春の日をゆたかに吸ひて静もれりいにしへ人の植ゑにけむ竹

大和をゆきて

耳無ぞまづ見え來たる大倭青國原のかすみの中に

飛鳥川小橋わたれば輕のみち領巾ふり人のわれ待つごとし

初夏の輕き足どり人麻呂が妻問ひしけむ道を今行く

松のまにつつじ花咲きにしへの女山畝傍はをとめさびたり

若松の芽こそかゞやけうねび山神代ながらの初夏の日に

うねび山さかずと人のわびし鳥そのいにしへの鳥が今啼く

はるばると麥の穂なびけおほやまといにしへ人を吹きし風ふく

ありたたし大政きこしけむ畏おなじき土をわがふむ(大極殿址)

あきらかに日はさしそへど鳥啼かず大御陵の樹のみひかれる(垂仁帝御陵)

棟近く群れゆく夏の雲かげに鴟尾の文字は目にうつり來ず(唐招提寺)

艶やけき佛の御肌あはれかの千年の前の露や流る(薬師寺)

いと白く雨を下して鉾杉のあひだに細き一筋
の空(春日)

夏の頃

夏くればさ躍る心白き服白き帽して手振り道
行く

いささかのものかげもなくあけてゆく夏の太
都の舗石のみち

地の上のおなじ生きもの風來れば木草もわれ
も一つ歎きす

岡に見る大野の末の朝霞ほのに青きは海にし
あるらし(晝に懸す)

研究室にて

今年また夏をこもれば親しまる去年こぼしつ
る床のインクも

倦むことのしげきをおぼゆあはれわが力去年
より衰へしかも

風に乗る雲よりはやく飛ぶものか空をななめ
に燕つばくらの群

快く朝のしじまをみだしつつわが緑る頁ぺじ音た
つるかな

家に臥す妻をおもへば書かみの上に病てふ字のあ
また出で來ぬ

ニコライの塔のさび色昨日より今日さやかな
り日を強みかも

大石鯛二先生の二週年に

ありしごと君がみことを聞きつべくこの一年
はあとにかへらな

めでましし山田の出湯湧き止まばただいささ
かは君を忘れむ

見せまつるものあらむと思はねど今年も
君のましなば

ことごとになつかしけれど憎きことのたまひ
し日も忘れ難かり

落合直文先生の記念會に

をかしきは大人より長くわが生きてまたもつ
どひの日にあへること

白き髯撫でてやいますいましなば清き翁と大
人もなりまし

深大寺にて

夕ちかみ小雨霧なし降り來れば梢もわかず煙
らへる樹樹

簾かけをしだり出でたる竹の末重きに帽を撫
でられにけり

雫をば軒に垂らして雨の中に門前の家は戸を
閉してあり

主僧今かへると見えてさしかけの傘ぞ動ける
寺の草原

湧くところ霧に見えねど幾ところ草間にあら
し水の音する

草の間の幾筋ここに流れあひ足許白く波あぐ
る水

大寺の縁起しめすと湧きやまぬ水にしあれや
ものふかき音

ゆるやかに連なり動くほの赤み鯉のかけ見ゆ
薄闇ながら

流れいづる方によりあひ亂れ藻の末たわたわ
と水に靡かふ

暮れゆけばいよいよ繁き水の音この水の音夜
もすがらかも

松浦草波君の彫像「懷古」に

いにしへの愁かなしみ君により形をとりて今
し目に見ゆ

相馬明次郎君の柩の前にて

別れるて日經し月經し今日かくて君を見むと
は思ひかけきや

木更津の細井魚袋君の朝鮮に行くを聞きて

よき歌の出できぬとても聞かすべき人なき國
に君がゆくとや

古ゆ名に負ひ來つる君きみ不さら去か君が去らむと思ほ
えなくに(木更津ば君不去より來れりと傳ふ)

一夜して越ゆとはいへど玄海の波はかしこき
ものにやはあらぬ

ある時

ことさらに惜しといふべき身ならねど待つべ
き事のあるここちして

目に近く迫るがままに事をして悔いむいとま
もなき日頃かな

大正十一年

〔百六十八首〕

冬ふかみ音なき夜の縁に居てちひさき月のあ
がるをぞ待つ

小庭の夜

ひえとほる夜の縁先に月待てば待つ人のある
こちちするかな

月のぼる檜の木もとの青木の葉白き光をま
づぞ受けたる

庭石の色のみすこし浮きつつも木の下闇はい
まだ深かり

しろがねの粉なす光ぞまづ來たる檜葉の木立
の狭きひまより

さす月の光か小夜を立つ霧か白みの中に木木
はうかべり

光もつさ霧ひまなく流れ來て木の間は月にな
りはてしかな

さし透るかげより白く闇の中に玉椿こそ葉を
ささげたれ

寒寒と光のさせばいささ竹うくるに堪へぬ姿
するかな

垣下かきにならぶ小篠こささの銀の穂ほのすくすくとして
月に向へる

さしいでし八つ手廣葉に遮さぎられ土にとどか
ぬ月光あはれ

八つ手の葉檜ひのの葉松しょうの葉青木せいぎの葉影異いにして
さし重かさなれる

土つちにしく廣葉細葉くわふせつにうちまじり楓かへの枯枝かへ影かげこ
まかなり

木木の影黒く寒さむけく縮ちぢまりて中空ちゆうくうに月の今いまし
なりぬる

うつり合ふ影かげと共にも月光げっこうは夜中やちゆうの土つちにしみ
とほるらし

音もなく木草は影を投げて伏す凄くなりゆく
月の下びに

縁近き手洗の水月ながら氷らむとして強く光
れる

大雪の朝牛込見附より土堤内を歩いて

朝早き堤のなだれふくよかに雪つもりゐて物
かげもなし

見あぐれば高き梢の松の葉の細細こまこまとして雪を
のせたる

雪雲の風にたゆればにはかにも松にさす日の
眼まなこにさやかなり

松が枝の高きところに風あらしをりをり雪の
霧なして散る

絹の上に雲母の粉をば吹く如く堤の雪に松の
雪散る

松かげに朝の電車はとどろけど物静かなる枝
の雪かな

朝空の緑をすこし曇らせて梢の雪の風に散る
見ゆ

ともすればすべらふ足をふみしめて危くも見
る松の上の雪

程ヶ谷の岡野公園に貝塚の發掘を見る

掘られゆく小貝の層に今あたる歴史の後の朝
の日光

食みて積み積みては捨てし原始の子その齒の
色し白き貝殻

堆き小貝を前に火を焚けば原始の人となりぬ
われらは

思ふどちすくなく住みて貝食みしその日いか
にか樂しかりけむ

谷あひのいささむら竹さみどりに貝もつ波や
ここに寄りけむ

棄てし日の同じ音かも掘りゆけばさくさくと
して貝のくづるる

思なく歎もあらず貝食みしその日もかかる日
の照らしけむ

早春の頃

しらけつつ咲き極はまれる梅の花散らむとす
なり夕風の中

恵まれし人のやうにもふみて行く二月の春の
朧夜の道

夕近みゆく舟もなき濁江ニギリの水にうつろふ岸の
残雪

英國皇太子を迎へ奉る某會の需によりて

聲あげてたたへざらめや五百重波千重波照ら
し君が舟きぬ

大やまとさくら今咲く待ちえたる君が光をそ
へて今咲く

新草のみどりをふみて君みませ霞に浮ぶ富士
のみ雪も

西東隔てはあらぬ春の風今日しも君が御手よ
りぞ吹く

久地にて

松のかげ寒くめぐれば梅林日のさす方に座を
移しけり

さむざむと細葉ならして並び立つ梅の林の二
本の棕櫚

花しろき梅の林のひる曇り何處かたとふ日の
ありどころ

わかれては逢ふ日さだめぬ人とゆく春のゆふ
べの道のしづけさ

年久しうして江の島にゆく

遙かにも思ひし海の今ここに大きく白き手を
あげて来る

風たてる磯の廣岩平らかに寄せくる波のそば
ゆくわれら

風來ればちぎれむばかりうちなびく岩のあひ
だのいささかの草

三たび来てはじめて岩をこえ得たる波のまし
ろさ波の大いさ

避けて身をよするいはほに隙あらし錐の如く
に風とほりくる

磯邊より連なり上る岩の輝傳ひて高し波の穂
尖は

風よけて狭きいはほのはざまより海の怒をぬ
すみわが見る

見るがうちに岩間の水の盛りあがりすはや汐
尖ここまでも來つ

頬にかかると髪のみだれもうちわすれ少女海見
る熱き目をして

はるかにも野を傳ひくる鐘のごと岩室に聞く
外海の波

堪へがたき風の怒を避けがほに翼をまげて飛
べり鷗は

小庭

飛行機のをりをり來ては點を打つわが家の上
の春の大空

暮るるまで保たぬ空ににじみつつ白木蓮は静
もりて咲く

庭も狭せまにかげろふ立てばつくづくと見やる椿
の花も揺れをり

青き葉の隙ひまほの白き庭櫻散る日來れり雨しげ
く降る

春日さす軒より下りて落瓦くぼみの水を呑み
ぬ雀は

流れ来て椿をすべり竹くぐり落花は土におち
つきにけり

細井君おもはざるに來りて去る

俄かにも去り來り去る人みればまたおどろき
の目の見張らるる

鶏

さしだせば手にも上りぬ物怖おそといふきたなさ
を雛はもだざり

伏籠とれば短き羽伸し走りあふこの雛鶏の喜
を見よ

地の上におなじく生れ生きてゐて隔はあらず
鶏とわれとは

初夏の頃

餌に走り集ふ鶏こそかへしたれ畑の隅なる種
物の箱

雨止みてまだ薄ぐらき空の虹青葉の岡に末消
えて見ゆ

背戸口の若葉のかげにこぼれたりうすくれな
ゐの鯛の鱗は

ある晩

生れえし心のままにさめぬれど光はいまだ部
屋に満たざり

樋の山にて

山の道昇るがままに数まさりみゆる小島に今
し夕日す

おちつける心に見むと山の上の草に腰をばお
ろしたりけり

あまりにも大いなる故はてもなき海にむかへ
る目を閉ぢにけり

目の下のちひさき灣に入る舟のエンヂンの音
のここまで聞ゆ

いささかの岬となりて海に入るこの大山のは
てしさびしも

いと深き山ひだの間まの町づくり住み難き地に
人は住むかな

山松に夕嵐ふきくろみゆく海に向へるところ
は寒し

島山のひだにこもれる白き靄ひろごりまさり
夕べとなりぬ

紫に暮れわたりゆく島のかげ駆逐艇とや小さ
き灯ともす

春日野にて

ほのめくは月代かそも春日山なぞへの杉の末
さやに見ゆ

杉の立つ山のかなたに月あらし梢の空のほの
かに赤き

鹿はみな檻にかへりて音もなき野に見る月の
光の赤さ

山ふかき松の梢を赤き月離れたれどもこの野
は暗し

赤黒き光の鈍く流れきてわが立つところ月に
なりゆく

月かげの及ぶ限は煙りあひ小夜の大野の草は
静けし

をりをりに臥したる鹿の起きて行く木かげは
いまだ月に疎かり

神杉の梢を透ける月影は馬^{あし}醉^し木^びの上に落ちて
さやけし

法隆寺途上

埃たつ寺への道をかしこしや御かども皇子も
みゆきましけむ

石山にて

岩鼻に立つ子あやふし足もとの木木にさす日
をよろこびながら

四明が岳にて

底ふかく寺の麓をみせながら黒みつづけり谷
の杉村

親しさに手をあげてみつ大空は近く下りてわ
れを被へり

空の風光り下りてわれ繞る眞日の盛を山に立
てれば

親しもよ天つ光も大空も今わればかり近きも
のなし

日のさせるところばかりは緑にて藍に霞めり
湖も國內も

地久節

初夏の竹の御間のすがしきにほの見まつりし
水色の御衣

立ちますはここより數歩かずほと思ふより御民わが
身のかたまるおぼゆ

行啓の日

待ちまつり聞くもかしこし階段かたをみ履みます
なる御靴の音

御靴の響ぞ近き御裾のさやぎぞ近き面上げが
たし

もたぐれば御影あまりに間近きに再び頭垂れ
にけるかな

御苑にて

樂の聲つらなり響き御列は今し近づく花のか
げより

針葉樹若芽こまかに影おとす御幸の道はあし
た静かに

御裾のさやぎを前に額かぶたれてあればこころの
とどろき高し

久方の天つ日よりもなつかしき光をもちて皇
子は行きます

房やかに八重花櫻咲き垂るる御苑の道を過ぎ
し御列

播磨にて

あまれるは浮きて流れて柔かう足をうけたる
浅川の砂

夏の谷楓若葉をくぐる日にきららとひかる水
の涼しさ

日のさせばみだれゆらめき鮮やかに川底の砂
にうつるへる波

船ばたに足をかくれば川風にあがる幕はもわ
が面うつ

漁師等が投げ上げたれば川原かはらに撫子とともに
つかみたる鮎

青みゆくゆふべの水に音立てて鶺鴒飼人いま川
に入りたる

薄紅はくさかに穂薄靡く峽間より水は層なし落ち来る
ものか

ある朝

遠く行く車の響人のこゑ目閉ちてをればつば
らにきこゆ

稚子のこゑ鳥の囀り葉のそよぎ世は物音に満
ちはじめたり

軍用の自動車ならし遠くより家内やみちひびかせ地
をゆり來たる

庭の木のひろ葉細葉をふく風に露のまじりて
散る音きこゆ

竹の垣ひまくぐりえし今ならむ高くうちあげ
て鶏とりにぞなくなる

大地ちがほに傳はり來り物の音の親しくも身に響く
朝あけ

長瀬にて

初秋の日射曇れば水に添ふ巖いわたの皺のまさやか
に見ゆ

長瀬の岩の裂目を横切りて秩父の山の水落ち
やまず

暑き風岩より傳ふ眞晝間の川にうれしくこぼ
れ來し雨

漕ぎ上る舟に逆らふ水はやみ弓と撓める竹の
棹かも

舟にして身をそらしみる斷崖きりの上に道あらし
人動きをり

よく見れば靜かに雲のうつりゐて黒くよどめ
る岩かげの水

ほの透きて白き淺瀬の川砂の舟の底する音の
よるしさ

白き岩うつらふ淀は灰だみて初秋しるき薄濁
かな

沼津にて

雨ふくむ雲のおほへばおそろしさ加へてひろ
し富士の裾野は

旅の目は雨としなるか見るがうちににじみ下
れるいただきの雲

修善寺にて

庭をゆく水の響と虫の音と夜もすがらにて旅
は寝苦し

秋さむみ色冷やけき雲の上に黒く鋭き富士の
瘦肩

のぼり来て見れば人あり秋風のさやぐ音する
赤松の山

ある日

悔心めざめぬひまをぬすみつつなせばなさる
るこの頃のわざ

椅子にゐてふかくも黙すこの朝のこのわが心
傷つけじとて

岩殿山にて

そのかみの山家の子らに身をかへし茸の飯を
食ひて飽かずも

黄に照らす公孫樹のもみぢ稀に落ちて静かな
るかなこの山寺は

たどり來し道一筋の外にまだ知るものもなき
國はひろしも(物見山)

うちひらけ果こそしらね親しみの乏しかる野
は見らく淋しも

幾處稻田の黄をば限る木の森となりつつ空に
つづける

いくばくの岑はた谷ぞみ空まで淺黄の波のた
ちのぼりたる(十九谷)

岑と岑つらなる上に盛り上り武甲高嶺は日に
近づけり

觀兵式の日

ひんがしの風高う吹き雲の飛ぶ影見ゆ富士の
空を西へと

君が代の樂の波こそ寄せくなれわが大皇子の
來らすらしも

人多きここの廣原嬉しくもわが居るところ少
しく高し

大皇子は椅子よりたたし使臣らに謁たまはす
か手舉げたまへり

禮まやかに進み退き使臣等は謁またまはすをかし
こむらしも

大皇子の乗り出でませば朝日子の影も従ふこ
こちするかな

今しわが前をわたらす大皇子のこの御姿のい
つくしさはも

いはまくも畏かれどもなつかしく親しきかも
よわが大皇子は

群れつづく騎兵の小旗ゆらめけば夕焼雲の風
に散ること

横列の砲車うごけばともなひて漲りすすむ土
埃かも

進みゆく主人の馬にまつはりて犬こそ走れあ
はれその犬

薄の原にて

ほほけたる薄の穂なみかげさして光すくなき
この一路かも

指尖のふとりをおぼゆ薄原二里にあまりてわ
が來つらむか

風もなき堤の薄たまさかに動くと見れば人の
刈り居り

薄原行くにはあかね別路問ひしところは遙か
になりぬ

少女

地につけばすぐに足あげはづみたる鞠のやう
なる少女のとも

ことさらにつくる眞顔もしばしにてわらひく
づるるわが少女ども

おどろきの眼まなこみはりてわが少女世になき事を
聞くすがたする

ある朝

いね足れる眼まなこの上うへにきたりけり妻があしたの
ほほゑみの顔

おだやかに夜は朝となりわがためによき日と
なりぬいざや起きてむ

つとむるにつとむる験しるしなけれどもこの朝夕の
いそがしさはも

たふとかる教のままに生きてゐて生きがひの
なき身としなりぬる

落つばかり乗りあふれたる朝電車時せまりたり
 乗らであらめや

伊豆にて

枯草の山の峽間に見いでつつ懐かしむかな一
 片の海

うちあふぐ高き峯より垂氷してなかば切れた
 る山のたぎつ瀬

幾條か垂氷の白さ目に見えて夕靄かかる山の
 高ざし

みちもせに松の枯葉の散りしきて冬の山路あ
 かるくもあるか

霜うけぬ石蔭の葉のむれつづき青さをぐらさ
 山のかたかけ

青淵の底もみゆやと細松の幹を手握りわが傾
ける

登りえて岨せきより見れば底の藻のゆらめき寒く
波うちあつる

冬ざれし離れ小島の岨せきの皴せきあらはに見ゆる夕
あかりかも

大正十二年 〔七十首〕

病てふ利鎌をもちて迫りよる二月にむかひわ
が立つものか

一月の末

電車内に發病す

きららかに光満ち満ちあはれわが眼まなこもの見ず
なりそめにけり

立てるままい倚りかかれば人の肩われの肩と
も思ほえなくに

病むとしも知りてやあらし弱肩にい倚れる我
を人は咎めす

「薬あり」「ここにもあり」といふ聲の風よりすこ
しさやかに聞ゆ

あひよりてやさしき眼めして見るならむ人のけ
はひの近近とする

池邊義象先生をいたみて
あやまちて時の使は君をまた悲しき人の數に
入れつる

岩谷莫哀君に

安房の海底くつがへし波も立てつれづれと居
む君がなぐさに

旅順に行く人に

君越えてゆくといふなる海青し西に傾く夕空
のはて

外遊する人に

ともに行く人もあらめど人の國心細かる日の
多からむ

夢だにもこよひは見えよこともなくあけて行
かむはあまりはかなし

さかさまに木も生ひよとも思はねど異なる事
のいささかはあれ

吉野村にて

梅に行く渡わたると川岸の竹の古葉をさくさ
くふむも

こまごまと山葵畑の石くぐり解けしばかりの
山の水ゆく

仰ぎ見る空青うして梅の花ちらほらさけり高
き梢に

簾かげにさむけき枝をあつめても谷間の梅は
いまだ咲かざり

しづもれる岸の竹むら日のさせば透きて見ゆ
なりまさかりの梅

拓かれて畑の真中になれる梅ほしいままにも
花つけにけり

梅のかげみだれうつらふ畑土に福壽草こそ黄
を點じたれ

きよらにも晴れたるものか花多き五百木の梅
の上の遠山

八木光貫君をいたみて

まさやかに黒き顔見ゆあはれ君君はまことに
死にたまひしか

新婚の人に

新らしき姿をもちてあひ寄れる二つの心神よ
守らせ

數しらぬ人の中よりただ二人選^えられし幸を神
に謝しませ

岩谷氏の愛子をいたみて

漂ひていづこにか行くいささかは歎も知れる
ちさきたましひ

明星が岳をのぞむ

雲もぬぬ夏の草山高ければ朝の淺黄の空は狭
しも

何の木ぞ色濃き草と見ゆばかり群がり續く山
のなぞへを

山ひだの緩き流をのぼりつつ光に消ゆる一筋
の霧

孟宗の淺黄の細葉鱗なし重なれば朝の緑ふか
しも

梢漏る光乏しく土にさしまばらに朝の籟はあ
かるし

重らかに垂るる末葉にすがりてはきらめき落
つる竹の朝露

風たえてしづもり深き竹籟に散り積む古葉音
のかそけさ

晴れし日の正午ひるの荒磯あらいそに満つ潮のこの竹籟を
透して青し

暮せまる岸の竹籟音もせずひそかに汐のさし
來るらし

登るべき夏の岩山前にてしばらく松の風に吹
かるる

壁立てるいはほのかげの目を疎みこの川隈の
みどりを暗し

並びたついはほの上の群松の末は雨もつ雲に
つづける

雨ふくむ群岩山の松林松蟬のこゑの澄みとほ
りつつ

松林深くし入れば木の間より奇しき岩山また
一つ見ゆ

苔だにも蒸さぬ岩群岩群にあたれば夏の日は
もさびしき

かれもまた岩山ならむ岩群のはてに直ぐ立つ
藍色の壁

浮彫の境ほのけみ岩壁の佛の顔のうるみ親し
も(観音寺にて)

筑波にて

かぎりなく日は照り満みてうねり来る雲のそ
びらのみな光りたる(女體の頂にて雲を見る)

風吹けば響をたてぬ瀧つ瀬か雲はいはほの隙
を流るる

よりにて立つ岩にあたりてくだかれて暗き谷間
になだれ落つる雲

谷かげの高き梢に遮られ落ちよどみたる一ひ
らの雲

風やめば動かぬ雲につつまれて冷えゆく岩と
われと悲しき

大震の日

ひたぶるに大空仰ぎ神まさばまさばとばかり
乞ひのむ心

事好むいたづら心昨日まで持ちしわれとはお
もほえなくに

ゆれやみて思へば事のあらざりし昨日の日こ
そ尊かりけれ

青ざめし顔ほのみせて疎かりし隣の人も垣越
しに問ふ

とどろきは遠く過ぐれど大き葉の八つ手の梢えだ
はまだゆれやまず

おそろしく苦しく長き夢さめしこち静まる
天地を見る

庭の木の梢ほのかに揺れのこり恐ろしき日の
夕べせまれり

天地におくところなみ庭の木のかげの藤椅子
に身を托しをり

潮と共に上る死人の群を見る

これや人黄色く黒く群がりて潮のまにまに上
り來るは

焦げただれ濁れる川の淀に浮く群も昨日の都
人たち

濁川焦げてうかべる舟板の上に黒きは誰れの
愛子ぞ

群がりて黄黒きくろき中にくれなるの裳裾きんぐろほの見ゆ
女なるらし

さす潮の流を早み川下ゆ目路のかぎりを上り
來る人

大橋の焦げし板間ゆ見おろせばをとこをみな
の骸むね群れ上る

人の世の末は今かも人の骸むねけものの骸むねと争ひ
上る

まかがやく眞晝まひるの川にあなあらは浮藻うもなして
もただよふ屍かばね

信濃にゆく汽車にて

ゆられつつむかふ心よ夜の汽車の窓のがらす
の深きくもりに

とどまらで行く停車場か夜のまどの外をぼや
けて灯の流れたる

がらす戸の下を黒めて山らしきものを動ける
明けてゆくらし

みち湛ひやや青みたる湯の上に湯ぞ落ち来る
白くよれつつ(浅間温泉にて)

闇深き社の空をするとくも神の使の驚なきと
ほる(穂高神社にて)

ともしびも神の心も動くごと太鼓頻しきうつ夜よの
社かな

わがために人の踊らふ木曾踊みてゐる心われ
も踊らふ(雨の日穂高町にて)

山の國信濃に來り山を見ず歸らむとして心た
ゆたふ

朝ぐもり終

後記

「暫く君の歌集を見ないが、出してはどうか。」といふ人の勧めで、大正七年から十二年までの歌を選んで見た。これをすつと見渡すと、自分といふものが、はつきりと浮んでゐない感じがして、著しく不満になつた。

自分のこの頃の願は、靜かな境地にゐて、靜かな心持になり、靜かに思索し、靜かに制作するといふにある。そして、それに向つて進みつつあるのであるが、自分の歌には、どうもその感じが稀薄である。

しかし、まとめたものであるから、ともかくも出して見ることにした。

岡野榮君が挿畫、植松壽樹、松村英一、佐佐木清子三君が周旋の勞を執ら

せられた。

この諸君に厚く御禮を申し上げる。

大正十四年四月

著者

歌集朝ぐもり

定價金貳圓五拾錢

大正十四年五月十日印刷
大正十四年五月十五日出版

著者 尾上柴舟

發行者 前田隆一
東京市日本橋區元大工町一番地

發行所

東京市日本橋區元大工町一番地
振替長野三三二六八番

紅玉堂書店



紅玉堂出版文藝書目

◆目書藝文版出堂玉紅◆

石川 啄木著	啄木歌集	送定費價六一錢圓
國木田獨步著	獨步詩集	送定費價六一圓十錢
半田 良平著	短歌新考	送定費價二圓三十錢
松村 英一編	改選現代短歌用語辭典	送定費價六圓八十錢
鷹野 つぎ著	小説ある道化役	送定費價八圓五十錢
松村 英一著	歌集やますげ	送定費價十三圓
花田比露思著	歌についての考察	送定費價二圓五十錢

(1)

◆目書藝文版出堂玉紅◆

尾山篤二郎著	處女歌集	送定費價一圓八十錢
半田 良平著	歌集野づかさ	送定費價十二圓
土岐 善麿著	歌集緑の斜面	送定費價二圓五十錢
新島 榮治著	詩集濕地の火	送定費價八圓三十錢
同	同隣人	送定費價八圓五十錢
若目田三郎譯	詩集アロシエの鐘	送定費價九圓十錢
浦瀬 白雨譯	現代英米詩選	送定費價八圓五十錢
西村 陽吉著	歌集第一の街	送定費價一圓九十錢

(2)

◆目書藝文版出堂玉紅◆

窪田 空穂著 歌集 泉のほとり	尾山篤二郎著 短歌五十講	松村 英一編 現代一萬歌集	松原 至大著 詩集 海の愛	同 詩集 哀別	勝田 香月著 詩集 さびしき人々へ	進藤 延著 硬球 欣球 テニスの智識と競技	服部 亮英著 スケッチと漫畫自在
送定 費價 八一 錢圓	送定 費價 十二圓三十 錢	送定 費價 十二圓三十 錢	送定 費價 六十五 錢	送定 費價 六圓二十 錢	送定 費價 六圓九十五 錢	送定 費價 八圓三十 錢	送定 費價 六圓三十 錢

◆目書藝文版出堂玉紅◆

松村 英一編 代匠記、考 略解、古義 萬葉集	窪田 空穂著 短歌隨見	石川 啄木著 啄木遺稿	紅玉 編輯局 活用現代新語辭典	河井 醉著者 近代詩用語辭典	伊藤 恣著 表現派 戯曲集 生血の壺	新井 紀一著 小説 雨の八號室	橋本 墨花著 花と花言葉
送定 費價 十二圓八十 錢	送定 費價 十二圓五十 錢	送定 費價 十一圓七十 錢	送定 費價 八圓 錢圓	送定 費價 八圓八十 錢	送定 費價 八圓五十 錢	送定 費價 八圓 錢圓	送定 費價 八圓八十 錢

◆紅玉堂出版文藝書目◆

半田 良平著	芭蕉俳句新釋	定價 三圓五十錢 送費 十圓五十錢
同 編	芭蕉俳句全集	定價 三圓五十錢 送費 二圓五十錢
服部 亮英著	漫文もぐらもち	定價 二圓 送費 八圓
村田 光烈著	土を流るる永遠の愛	定價 十二圓 送費 十二圓
尾山篤二郎著	歌集草	定價 二圓五十錢 送費 十圓二十錢

◆詳細目録は葉書に依つて「紅玉堂タイムス」を御申込願ます◆

10. 廿二入. 膏.

カニ

ノ